

■田辺朔郎 若くして琵琶湖疏水の建設を成功に導いて、日本の近代土木工学の礎を築いて、疏水とともに神話化された。

たなべさくろう

遣欧使節・1861=

江戸の根津愛染で、高島秋帆門下の洋式砲術家の幕臣田辺孫次郎忠篤長男に生まれる。田辺家は代々学問を以て幕府に仕えて来た家柄で、尾張藩儒者の村瀬海輔から田辺家の養子となつた祖父石菴は、昌平齋教授や甲府徽典館の学頭を務めた。父は、富士見御宝藏番となり、幕府の講武所で西洋砲術を教えたが、

生麦事件・1862=1歳：誕生後9か月に父親がコレラで死去し、家督を継ぐ。叔父の田辺太一が後見人となり、幕臣花井彦次郎の娘で女丈夫の母ふき子によって、姉鑑子とともに育てられる。

明治維新・1868=7歳：戊辰の役になり、母子で祖父石菴の門下生だった武蔵国幸手の郷士真中林之助宅に疎開、途次の宿で野盗の襲撃された際、立ち向かおうとしたほど向こう意気の強い子であった。到着後、幕府は壊滅、

戊辰戦争終・1869=8歳：沼津兵学校一等教授に着任した太一に従つて、母子とも沼津に同行し、初の日刊新聞1870=9歳：沼津兵学校付属小学校に入学したが、

廃藩置県・1871=10歳：叔父太一が外務省に官任し、東京湯島天神町に転居、近くの南部藩の塾で英語・数学・漢学を学ぶ。明治6年政変1873=12歳：叔父太一が一員となった岩倉遣欧使節団の帰国を横浜港へ迎えに行った際、外国汽船ゴールデンエイジ号を見、太一から欧米の発展の話を聞いて、工学に興味を持つと、太一の勧めで、

初の民間工場1875=14歳：工学寮付属小学校へ転校、

西南戦争・1877=16歳：工学寮より改称した工部大学校に進み、土木工学を専攻。

沖縄県編入・1879=18歳：一般教養の普通科から、専門科に進むと、実際のプロジェクトへの建白するならわしに従つて、1880=19歳：「東京湾築港計画」を松田道之東京府知事に提出するも採用ならず、

明治14年政変1881=20歳：実地科に進み、卒業研究をめざし、工作局の辞令により全国に散らばる学生の一人として、京都大阪への出張を命じられ、琵琶湖疏水計画のことを知るや、調査研究の対象にし、経済的にも全て支援してくれた叔父太一が破産し、自らは機械に打ち付けて右手骨膜を痛めたが、打ちひしがれることなく、

新体詩抄・1882=21歳：姉鑑子が片山東熊に嫁ぐ。この年、京都府知事北垣国道が上京し、琵琶湖疏水の特許受けるべく、連日政府首脳と話し合いをしていた際、工部大学校生として、トンネルの話をしたのが最初の出会いとなるもそれ以上でなく、卒業研究を、左手一本で、論文、設計図を書き終え、後年神話化される一話になる。

岩倉具視没・1883=22歳：北垣は、前任地の高知県から呼び寄せた測量技師鳴田道生による測量図を携えて上京、農商務省と裏議して琵琶湖疏水計画書が出来上がる。卒業すると、おそらく叔父太一が親交していた工部大学校校長鳥圭介に頼んで、北垣に働きかけて採用されるが、北垣がつけていた日記「塵海」には、田辺の名は出て来ない。

内閣発足・1885=24歳：試用期間を経て、測量技師鳴田道生の後輩として、疏水プロジェクトに従事し始め、名コンビになるが、やがて、測量を越えて幅広い業務に対応できる工部大学校卒のエリートとして、地位が上になり、

帝国大学始・1886=25歳：*工事部長田辺、測量部長鳴田の体制になって、北垣の「塵海」に頻繁に登場、鳴田の名は消え、関係も悪化したため、自らはあくまでも設計施工の責任者であつて、打ち合わせに際しては、北垣に、鳴田を同席させるよう申し出、測量については最後まで鳴田が責任を負うも、完成後、鳴田は忘れられる。

初の対等条約1888=27歳：2年前に、織屋川島甚兵衛が品川弥次郎駐独公使に随行して欧米を回った際に聞きつけた水力動力について、上・下京連合区会で議題となり、区会議員の高木文平とともに派遣されて渡米、アスペンで世界初の水力発電を見て、予定していた水車動力を水力発電に変更し、蹴上発電所を創設、のちの京都の近代産業化に大いに寄与することになることから、識見、直観力、分析力など能力の高さは流石である。

帝国憲法発布1889=28歳：帝国議会始・1890=29歳：榎本武揚の媒酌で、北垣の長女静子(しづ)と結婚。*疏水が完成、日本人だけで成し遂げた初の大プロジェクトとして、大騒ぎになった。[英國メール新聞]に疏水建設のスターとして、報道されたことで、神話化は一気に加速。卒論「琵琶湖疏水工事編」は海外雑誌にも掲載され*も、原文も邦訳も残っていない。

足尾鉱毒始・1891=30歳：日本初の水力発電所、蹴上発電所が完成。工部大学校より改称した帝国大学工科大学の教授になり帰京。

工手学校の教務主理も兼任し、工学博士号取得。全国各地の利水事業を手掛け、調査・指導して行き、

大本教・1892=31歳：太一の娘で、日本女性初の小説を書いた花園が三宅雪嶺と結婚。濃尾地震の震災予防調査会委員就任、郡司千島探検1893=32歳：内務省土木会委員就任。前年には電灯への供給、翌々年には日本初の市街電車がが始まって、電気事業が軌道に乗り、その収益から見ただけでも、疏水は大成功プロジェクトだったと言えよう。

日清戦争始・1894=33歳：腸チフスに罹患し入院。「鴨川運河」完成。イギリス土木工学会からテルフォード・メダル(同会初代会長のトマス・テルフォードの遺産により創設された賞で同会最高の賞)を授与され、

日清戦争終・1895=34歳：次男主計が誕生するが、田辺太一の長男が死去した際、見かねて、養嗣子にする。「防火水道」完成。

白馬会・1896=35歳：アメリカの科学誌[サイエンティフィック・アメリカン]に論文が掲載されるなどして、名声がさらに高まるなか、北海道鉄道敷設法が制定され、北海道庁長官だった岳父北垣に請われて、東京帝国大学を退任、北海道庁鉄道部長となり、家族と共に北海道へ転居。北海道全道に1000マイル(約1600km)の幹線鉄道敷設設計画の調査に着手し、計画・建設に携わる。その際、石狩・十勝間の峠を狩勝峠と名づけている。

八幡製鉄始・1897=36歳：鉄道建設費要求のため帝国議会に出席、

子規句歌革新1898=37歳：三男多聞が誕生。滝川(当時ソラチブト)から旭川までの上川線開通。

ビア国産化・1900=39歳：北海道府鉄道部長を免官し、ウラジオストクでシベリア鉄道を視察後、モスクワから欧州、北米の土木施設を視察し、帰国して。政界軍部要人に報告。京都帝国大学理工科大学教授に迎えられ、

田中正造直訴1901=40歳：「西比利亜鉄道」上梓。明治工業史編纂の必要性を説き、

日露戦争終・1905=44歳：日露戦争前のロシアの軍人の提案でトンネル入り口に英文の掲額なされ、功績を不動のものにした。

満鉄発足・1906=45歳：

この間、第二琵琶湖疏水を含む三大事業のほか、堺市の水道、吉井川・旭川、木曽川、本栖湖、紀の川、境川、小瀧川の水力、伏木・高岡間運河など、全国各地の利水事業の調査、計画、助言、指導を行う。

韓国併合・1910=49歳：宮省内大臣寮御用掛に就任。

大逆事件判決1911=50歳：列車抵抗力についての研究論文発表。大学に予算がなく、自費で汽車製造会社に試験車ケン1を発注。

明治天皇没・1912=51歳：

大正政変・1913=52歳：政府の要請で鉄道院のための水底トンネル調査(のち閑門トンネル)を行い、日本が初参加するロンドンでの万国道路会議出席のため欧州・北米視察。

第一次大戦始1914=53歳：東大建築学科在学中の長男秀雄が死去、三男多聞が嗣子となる。

21ヶ条要求・1915=54歳：叔父の田辺太一死去。

民本主義・1916=55歳：以後2年、京都帝国大学工科大学長。岳父の北垣国道死去と不幸が続いた。

ロシア革命・1917=56歳：工学会の明治工業史編纂委員会委員長に就任、

大暴落・1920=59歳：自ら、疏水について総括した圧巻「琵琶湖疏水誌」を著す。

原敬首相暗殺1921=60歳：

関東大震災・1923=62歳：京都帝国大学を退官。京都府が「工学博士田辺朔郎君紀功碑」を建立。この年まで京都に過ごした。

護憲三派压勝1924=63歳：勲一等瑞宝章。友人らから、最初の伝記となる西川正治郎「田辺朔郎博士六十年史」を贈呈される。

退官後も、名古屋市中川運河の計画調査、閑門トンネル、大阪市営地下鉄、弾丸列車計画等に参画し、世界恐慌・1929=68歳：土木学会会長に就任し、同学会による「明治前日本土木史」の編集委員長、

満州事変・1931=70歳：「明治工業史」全10巻にまとめられた。

国際連盟脱退1933=72歳：

芥川直木賞始1935=74歳：谷口嘉六、宮部義男共著の「日本海と大阪湾とを結ぶ水運の聯絡」に、古くから様々な琵琶湖経由で本土を横断する多くの構想や計画があつたが、その集大成とも言える、琵琶湖を経由して敦賀湾と伊勢湾を結ぶ論稿「本土横断琵琶湖運河構想」を寄せ、時節がら、軍事との絡みまで触れている。

日中戦争始・1937=76歳：嗣子多聞が、内務省朝鮮総督府鉄道本局釜山地方交通局長に。

日米開戦・1941=80歳：

1942=81歳：

創価学会検挙1943=82歳：真下伍一による、*自らがモデルになった初の小説「琵琶湖疏水物語」が刊行されて、神話が完成するなか、年金+総武装 1944=83歳：没した。

墓所は京都市左京区大日山墓地と青山靈園(田辺太一と同墓)。没後も、多数の、伝記、小説、口述伝承などによって、神話化が進められて行く。まさに、琵琶湖疏水が田辺朔郎をつくったと言えよう。